

[7] 小林市小体連

I 年間事業

回	期 日	時 間	会 名	内 容	会 場
1	5月7日(木)	15:30~16:30	理事会	本年度役員選出・事業計画	南小
2	6月5日(金)	15:00~16:30	理事会	水泳大会計画検討 研究方針について	南小
3	7月22日(水)	14:00~16:30	理事会	水泳大会前日準備	南小
4	7月23日(木)	8:30~16:30	大会	小体連水泳大会・反省	運動公園 南小
5	8月31日(月)	13:30~16:30	理事会	陸上大会計画案検討 研究経過報告	南小
6	10月20日(火)	13:30~16:30	理事会	陸上大会前日準備	南小 運動公園
7	10月21日(水)	8:00~16:30	大会	小体連陸上大会・反省	運動公園
8	11月13日(金)	13:30~16:30	理事会	授業研究会・研究協議会	東方小
9	2月19日(金)	15:30~16:30	理事会	年間反省・次年度に向けて	南小

II 事業部のあゆみ

1 水泳大会

- (1) 大会名 第8回小林市小学校体育連盟水泳大会
- (2) 実施日 平成27年7月23日(木)
- (3) 会 場 小林市総合運動公園屋内プール
- (4) 出 場 者 小林市内小学校(12校)5・6年生選抜選手
- (5) 実施種目 自由形・平泳ぎ(25m・50m)・100mリレー(自由形25m×4)
- (6) 競技方法
- ・ タイムレースとする。
  - ・ 出場する種目の距離を完泳できるものとする。
  - ・ 出場種目数は1人1種目とする(リレーは除く)。
  - ・ リレーのチーム編成については、小規模校に限り異学年、男女混合でも可とする。ただし、男子チーム扱いとする。
  - ・ その他細部については、小林市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- (7) 日 程 受付 8:10~ 8:30 開会式 8:40~ 9:00  
競技 9:10~12:00 閉会式 12:00~12:20

種 目			種 目		
1	6年 女子	25m平泳ぎ	9	6年 女子	50m自由形
2	5年 男子	25m自由形	10	6年 男子	50m自由形
3	6年 男子	25m平泳ぎ	11	6年 女子	50m平泳ぎ
4	5年 女子	25m自由形	12	6年 男子	50m平泳ぎ
5	6年 女子	25m自由形	13	5年 男女混合	100mリレー
6	5年 男子	25m平泳ぎ	14	6年 女子	100mリレー
7	6年 男子	25m自由形	15	6年 男子	100mリレー
8	5年 女子	25m平泳ぎ			

- (8) 表 彰 各個人種目6位、リレー種目3位までを入賞とする。  
参加児童全員に記録証を渡す(※標準記録突破者については別途)

(9) 反 省

- エクセルでの記録システムを導入し、素早い計算と閉会式での発表ができた。陸上大会での活用も行いたい。

- 各学校よく練習されており技術向上の見られる大会となった。標準記録突破者も競技によって見られるので、今後は大会記録の更新も達成できるよう更なる指導の充実を図る。
- 平泳ぎでの泳法違反が年々少なくなっている。指導者も更に指導方法等工夫が必要。

## 2 陸上大会

- (1) 大会名 平成27年度小林市小学校体育連盟第56回陸上大会
- (2) 実施日 平成26年10月21日(水) ※ 予備日：10月22日(木)
- (3) 会場 小林市総合運動公園陸上競技場
- (4) 出場者 小林市内小学校(12校) 6年生
- (5) 実施種目  
 一般種目 100m走、50mハードル走  
 選抜種目 100m走、50mハードル走  
 長距離走(男子1000m・女子800m)  
 ソフトボール投げ、走り幅跳び、学級対抗リレー、学校対抗リレー
- (6) 競技方法  
 ・ 競技は全てタイムレースとする。  
 ・ 選抜種目については、一人一種目までとする。ただし、800m、1000m、学級対抗リレー、学校対抗リレーは除く。小規模校については配慮をする。  
 ・ その他細部については、小林市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- (7) 日程  
 開会式 9:40~10:00  
 競技 10:00~14:10 閉会式 14:35~15:00

	種目		種目
1	男子走り幅跳び	7	学級対抗4×100mリレー
2	女子100m	8	男子ソフトボール投げ
3	女子ソフトボール投げ	9	女子走り幅跳び
4	男子50mハードル	10	男子100m
5	男子1000m	11	女子50mハードル
6	女子800m	12	学校対抗4×100mリレー

- (8) 表彰 各種目6位、学級対抗リレー6位、学校対抗リレー3位まで入賞とする。一般種目1位の児童に記録証を渡す(標準記録突破者については別途)。
- (9) 反省
- 選手宣誓の児童が倒れるトラブルがあったが、臨機応変に対応できた。児童の体調不良や放送機器のトラブルは十分に考えられるため、全理事・全職員が臨機応変に対応する心構えが必要である。
  - 各学校とも児童の態度が年々立派になっている。指導を十分できている成果が大会にあらわれている。
  - 放送機材を小体連で準備し適切に配置できた。
  - 標準記録突破者や大会記録等例年より多く記録が生まれた。日頃の体育学習の成果と大会への各学校の取り組みが発揮された大会であった。
  - 児童が100Mという距離を自分の中で組み立てて走り切る力が足りない。学校の運動場で直線100Mをとり、100mの走り方を知り、走る感覚を身に付ける必要がある。
  - ハードルについては、学校差は本年度も見られた。

## 1 研究主題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育学習の在り方  
～「わかる・できる・かかわる」を実感させる楽しい授業を目指して～

## 2 主題設定の理由

現在、私たちを取り巻く環境は大きく変化し、それに伴い子どもたちの生活環境も変化し続けている。テレビ、携帯型ゲーム、カードゲーム等、現代の子どもたちは身体を動かさなくても楽しみを得るための手段をたくさんもっている。また、生活が便利になることで身体を動かさなくてもいい状況も増えてきている。さらに子どもたちの運動不足の直接的な原因として、安心して遊ぶことのできる「時間・空間・仲間」の減少も深刻な問題として挙げられる。子どもたちの中にはスポーツ少年団に入って運動をしている子どももいるが、運動をたくさんする子どもと全くしない子どもの二極化や、運動をしていても一部の運動技能の向上に限られてしまう状況も見られる。このように様々な問題を抱えながら現在の子どもの体力は低下している傾向にあり、体育科学習において運動に親しむ資質や能力を育てていくことが重要な課題であると考え、本主題を設定した。

## 3 研究の目標

- 児童の運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるために、ボール運動に置ける体育科学習指導の在り方を究明する。

## 4 研究の仮説

- 「わかる・できる・かかわる」を意識した学習活動を展開することで、児童が運動の行い方や練習の仕方を知り、児童の運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることができるであろう。

## 5 研究の内容

- 「ボール運動」を中心にした指導の工夫

授業研究会

単元	学年	授業者
バスケットボール	6年	東方小学校 教諭 尾辻 博志

## 6 研究の実際

### (1) 「わかる」ための工夫

#### ○ 資料の掲示・活用

児童がバスケットボールの時に必要な動き方や練習の仕方、作戦などを体育館に掲示しておき、いつでも確認できるようにした。

#### ○ 学習カードの活用

チームとして振り返りを行うことで、ゲームの中で自分たちが立てた作戦を見直し、次のゲームをどのように改善していくべきか理解し合うことができた。

#### ○ ICTの活用

東方小学校では、体育館にもパソコンとモニターを常設している。それらを活用して、動き方の見本や、自分たちの動きの中でよかったところを確認できるようにした。

## (2) 「できる」ための工夫

### ○ 運動量の確保

パスやドリブル、シュート等の個人技能と、チームプレーの技能を高めていくために、1チームに1つのゴールを与え、練習の場とし、一人一人がより多くボールに触れる機会をつくるようにした。また、ゲーム中心で学習を進め、ゲームの時間も多く確保できるようにした。



### ○ 意図をもった声かけ

ドリブルをさせながら教師に注目させることで、自然とルックアップしながらのドリブルを行うことができた。また、話合いの時間には、作戦が上手くいっていないグループを中心に声かけを行うことで、作戦が成功させられるようにした。



## (3) 「かかわる」ための工夫

### ○ 教え合い

指導者が意図的にグルーピングを行うことで、チームを等質化した。その中で、各グループの中の運動が得意な児童を中心に教え合いをすることができた。



### ○ 「バスケットボール」へのかかわり

大まかなルールを教師側が初めに示し、その後は児童中心にルールの変更を行っていくことで、自分たちにあったルールを作成し、より「バスケットボール」への関心を高めることができた。

## 7 研究の成果と課題

### (1) 成果

○ 授業研究会を行ったことにより、よりよい指導はどうあるべきかについて深く考えることができた。

### (2) 課題

○ 授業研究会を行ったが、体育主任以外の先生方は数名の参加であった。小林市の体育科指導の充実のためにも、来年度はより多くの先生方に研究の様子を知っていただく必要がある。